

「書評」 吉田茂樹著『対話による文章表現指導の研究』 ―〈個に即した支援〉の理論と方法―

(二〇一二年六月一日 溪水社)

渡 辺 春 美

吉田茂樹氏は、一九九八年一月（一九九七年度）に鳴門教育
大学大学院において、世羅博昭教授の指導の下、修士論文「書
くことよって生ずる『読み』の内的過程に関する研究」を提
出している。大学院修了後は、高等学校にあって、一〇余年を

かけて「書くこと」の内的過程の研究を授業実践に生かすこと
に努めた。帰任直後に着手された、基礎資料としての生徒と教
師の対話の「録音・録画・口述筆記」は一〇余年にわたって集
積され、研究の深化に生かされた。「書くこと」の内的過程の
研究は、学習指導に高い有効性を備えた新生の実践理論として
結実した。本書は、その成果を体系化してまとめたものである。

本書の序章、結章を除く本論部は、「第1章 現代の高校生
が書く文章の特徴と課題／第2章 対話による〈個に即した支
援〉の理論／第3章 対話による〈個に即した支援〉の方法／
第4章 対話による〈個に即した支援〉の実際」の四章である。

第1章では、高校生の書いた文章の調査から、その特徴を、
話し言葉の「次は何かを決めていく方略」を使用し、思いつく
ままを逐次的に（書くことの苦手な生徒は話し言葉で）書く傾
向にあると捉えている。この傾向の文章は、吟味する過程の欠

落よって内言の活動が促進されず、認識の深まりに繋がるこ
とがない。したがって、認識に繋がる過不足のない表現を獲得
しえた満足・達成感も得られないとする。ここに今日の高校生
の書く文章の実態とその問題点が明確に捉えられている。

第2章では、認知心理学他の知見を基に、表現の内的過程の
把握と学習者の支援の方法が追求されている。カウンセリング
的手法からは、個としての学習者の声に耳を傾け、学習者の自
立・自律を目指し、対話による問題解決を図ることの重要性が
捉えられている。表現指導に関しては、倉澤栄吉・Hazes &
Flower・内田伸子・Bereiter と Scardamalia・Bauer の先行の
知見に学び論を深めている。まず、従来の、主題、構想、叙述
を経て推敲を行う作文生成過程とは異なる、表現の全産出過程
（構想・言語表現・修正）を制御するモニタリング機能の重要
性が把握される。ついで、モニタリングは、「プラン」「テーマ」
の意識化よって機能し、「読み返し」よって「自己の活動
の評価」と「新しい表現の手がかり」を与えることが明らかに
された。さらに、書くことが苦手な学習者を熟達者に成長させ
るために、「何をどのように書くのか」を吟味する自己内対話

を支援する必要性が捉えられた。加えて、自己内対話の支援のために、学習者と指導者がモニタリングによって思考過程を共有しつつ問題解決にあたる指導方法が見いだされている。本章では、表現の内的過程の把握に基づき、高校生の書くことに関する問題を打開する表現指導の理論が「個に即した支援」に焦点化されて鋭角的に追求され、その方向性が明確にされている。

第3章では、〈個に即した支援〉方法が、実践理論に練り上げられ、実践によって検証されている。その方法は、「大局をコントロールする支援」と「概念くだきの支援」の二つであった。前者は、表現活動において〈停滞〉している生徒に問題解決にあたらせるための言葉がけの方法である。主に①「どこがぴったりこないの？」(ズレの意識化)・②「なぜピツタリこないのだろう？」(ズレの原因の意識化)・③「それではどうしたらいいだろう？」(対案の生成)・④「これでいいのだろうか？」(対案の評価)という言葉がけである。後者は、③の対案の生成において、「《問い》」として思考しやすく「かみくだく」ことをねらいとしている。五W・H・五感・詳細化・比喩・明確化・要約等による言葉がけが用いられる。両者を用いた指導の有効性が、俳句の授業によって実証されている。

第4章は、〈個に即した支援〉方法を取り入れた、短歌・俳句・作文の授業研究の報告である。それらの授業に基づく研究は、理論の検証に留まらず、拡充が図られている。短歌・俳句の授業については、支援の不必要(見守り)・大局をコントロール

する支援・大局をコントロールする支援と概念くだきの支援の三種の支援の有効性が確かめられている。作文の授業では、一つには、記述過程における「教師―生徒」の相互作用が、生徒に外的な説得活動(教師との対話)と内的な納得活動(自己内対話)を促し、生徒の語りたいた物語の共創を生み出すことを解明した。二つには、カウンセリング技法(特に「基本的かわり技巧」)を援用した二つの支援方法の効果についてカウンセラーとの共同研究がなされた。その結果、支援方法の有効性ととともに、「(カウンセリング的に)援助しながらも(指導的に)制御する」教師の役割が把握されている。

本書第4章には、精神的な理由で登校できず、駅のトイレが落ち着く場所であったという生徒の短歌の推敲過程が、紹介されている。推敲は「大局をコントロールする支援」によってなされた。〈初稿〉「電車出て走って飛び込むトイレトその瞬間が幸福の時」について、「どこがすっきりしないの?」「なぜ?」「何を表現したいの?」「ピツタリくるのは、どんな表現?」と言葉がかけられる。生徒は、トイレに行く原因が、身体的理由ではなく、精神的な「解放」にあることに気づいていく。〈決定稿〉は「く解放の時」とされた。その個別指導の眼目は、生徒の「主体的真実」、「魂の叫び(声)」ともいえる「解放」という表現に出会わせることであつたと述べられている。

本書は、文章表現指導における〈個に即した支援〉の理論を構築する過程を、著者とともに辿ることが可能であり、方法の有効性を教師と生徒の対話記録によって臨場感と共に実感でき

る。私は、本書を読み進めつつ、実践理論の創造の場に参与している高揚感にしばしば包まれた。二つの支援方法による指導の要諦は、「作品としての価値（芸術性・文学性）の高さや完成度にこだわるのではなく、生徒一人一人の思考の筋道にそつと寄り添いながら、内在している言葉やイメージ（声）の深化・拡充を行うこと」にあるとされる。その根底に、生徒の声に耳を傾け、そつと寄り添い、対案の生成にむけて共に歩む、著者自身の姿勢が窺える。それが本書への感銘を深くしている。

（わたなべ はるみ・京都ノートルダム女子大学）